

氏名(本籍)	野村卓美 <sup>のむらたくみ</sup> (山口県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙第46号		
学位授与の日付	2003年3月19日		
学位授与の要件	学位規程第3条第2項		
学位論文題目	明恵上人の研究		
論文審査委員	(主査)	文学博士[名古屋大学] 教授	村上 學
	(副査)	文学博士 [京都大学] 教授	大山 喬平
	(副査)	教授	石橋 義秀
	(副査)	文学博士 [大谷大学] 名誉教授	鍵主 良敬

### 学位請求論文審査要旨

#### 論文の性格ならびに研究史上の位置づけ

明恵(1173~1232)は中世日本における特異な僧として『古今著聞集』や『徒然草』などに逸話が収載され、多くのひとびとの関心を誘ってきた。没後まもなく弟子喜海による『明恵上人行状記』3巻が編纂されたのをはじめとして多種の伝記(1971年東大出版会刊、高山寺資料叢書『明恵上人資料第一』に約20種を収載)が編纂されている。江戸時代には『梅尾明恵上人伝記』(1980年講談社学術文庫に翻刻)が刊行されて版を重ねており、現在においても白洲正子『明恵上人』(1974年新潮選書、1999年愛蔵版ほか)や河合隼雄『明恵 夢を生きる』(1987年京都松柏社刊ほか)を媒介として人々によく知られ、讃仰の対象となっている。

明恵に関する研究は仏教思想や国語学・国文学ほか多岐にわたる分野で決して少なくない。2002年12月現在の国文学研究資料館のデータベース(1941年から2001年までの国文学・国語学分野を中心とした論文(書籍を除く))では明恵をキーワードとする論文が189(因みに親鸞は541)存し、IN-BUDSからは「明恵」をキーワードとして162(親鸞は3453)の論文がヒットする。仏教思想の上で明恵は石井教道が「厳密の始祖」(大正大学学報3,

1928)として特徴づけて以来、その変遷を彼の経歴と併せて3期に分かって考察するのが常である。高山寺華嚴の教学面については省略に従う。いわゆる仏教文化の面で第二次大戦後の研究書に限れば、明恵の伝記については田中久夫『明恵』(1961年吉川弘文館、人物叢書)および奥田勲『明恵 遍歴と夢』(1978年東大出版会)の二書があり、現在の研究指標としての地位を保っている。また『高山寺資料叢書』(東大出版会)に『明恵上人資料』第一～五(1971～2000)や『高山寺古典籍纂集』(1988)などが収められて資料整備が充実した。いっぽう『明恵上人と高山寺』(1981年同朋舎)に各方面の重要な研究論文が集成され、『高山寺典籍文書の研究』(1980年東大出版会)にも明恵関係の論考が多数収められている。前記田中久夫の『鎌倉仏教雑考』(1982年思文閣出版)にはⅢ「明恵房高弁とその周辺」として14篇の論考が収録され、法然と明恵の宗教対決を取り上げた著書も町田宗鳳(1998年講談社選書メチエ)・袴谷憲昭(1998年大蔵出版)と複数出版されている。また明恵の和歌は無造作でおおらかな詠みぶりで古くから知られているが、研究書にも吉原シケコ『明恵上人歌集の研究』(1976年櫻楓社)と小沢サト子『東洋文庫蔵明恵上人歌集本文と総索引』(1976年私家版)があり、最近新日本古典文学大系第46巻にも歌集が収載され、平野多恵・見田僚子など若い世代の論考が出始めている。2002年3月には大阪大学大学院文学研究科広域文化表現論共同研究の成果として『〈心〉と〈外部〉——表現・伝承・信仰と明恵『夢記』——』が刊行され、山崎淳ら大学院院生や修了者を主とする18編の研究論文が収録されるなど、明恵について新しい世代による研究の段階が始まったことを感じさせる。

本論文の著者野村卓美氏は1972年大谷大学大学院仏教文化専攻修士課程に入学し、修士論文として『中世仮名法語の研究』を提出している。その際論文審査の副査であった故五来重教授の助言により野村氏は明恵研究を志すようになり、1974年大東文化大学大学院博士課程に進学、早稲田大学を中心とする説話関係の演習や研究会に参加して研鑽の場を拓げた。氏は博士課程を満期退学後、都立高校の教諭として勤務するに至ったが、爾来、明恵関係のほか『春日権現絵巻』『宝物集』などの研究論文を四十数本発表している。最近では山田昭全氏を主催者とする講式研究会のメンバーとしての活躍も顕著である。本学位請求論文は既発表の論文中、明恵関係のものを集成して3編を書き下ろして加え、『明恵上人の研究』と題して2002年2月和泉書院か

ら刊行されたものである。うち既発表の19編は論文の本文に初出を僅かに改訂したところもあるが、基本的な趣旨を変えているところはない。ただ注記については初出以後発表された研究業績を採り入れ、現在の明恵研究状況を反映したものになっている。因みに国文学側の明恵全般にわたる研究書としては本書は奥田氏の著書を嚆矢として第二番に位置するものである。

野村氏の研究歴は以上のようなものであるが、氏が明恵研究に着手し始めた時期は田中・奥田氏による明恵伝記研究の成果が完成し、高山寺資料の本文ならびに解題の公刊がある程度の規模に達した時期であった。すなわち基礎資料の整備がかなりの程度進み、国文学ないしは国語学の立場での本格的な明恵研究の第一段階が完成した頃とも言える。それ故に野村氏の各論考の主要な意図は国文学側の先行研究、特に前記の田中・奥田氏の伝記研究が明恵の弟子喜海の編になる『明恵上人行状記』（仮名・漢文の2種）をある意味で絶対化して依っているのに対しては『行状記』の史料批判を行い、『明恵上人資料』の各解題が書誌的内容に止まっている段階から踏み出して出典探索を行うなど、基本的な発想の範囲は先行研究のそれに従いながらもそれらの補完と訂正を志すものという性格を帯びることになった。

### 論文の構成と内容の要約

本論文は全5部22章から成り立つ。

第I部「明恵と説話」は明恵の説話環境についての論文の集成である。全7章、一「明恵における説話受容」、二「明恵と鴨長明をめぐる人々——説話受容基盤の一考察——」、三「明恵と慶派仏師」、四「明恵と和歌——歌道の師、歌道と仏教をめぐる——」、五「明恵の説話受容——明恵と『能恵法師絵詞』をめぐる——」、六「明恵説話の変容——『古今著聞集』の明恵説話を中心に——」、七「明恵説話の変容——『春日龍神』と明恵説話——」の各章を置く。

一章は明恵が著述に多くの説話を引用するにとどまらず、それらに登場する主人公の修行を自らの規範として自ら修行するという態度が見られることを指摘したものである。本書所収論文の中で最も早く発表されたものであるが、それ以後発表された野村氏の明恵に対する観点の基調をなすものとして、総論とするにふさわしい位置を占めている。

二章以下は、明恵の幅広い人脈の考証と、その意味についての論である。

二章は明恵ならびに鴨長明が音楽家藤原孝道・賀茂神主能久や歌人飛鳥井雅経らと交友関係があったことを考証し、彼らを媒介として明恵が鴨長明と直接的な交友関係があった可能性を推測した論考である。その発想の基底には両者が佛道・説話・和歌という場で共通する足跡を残していることがあり、交流の背景として後鳥羽上皇の文化圏を想定している。

三章は明恵と慶派の仏師、運慶・快慶・湛慶との関係の考証と、その意味についての論である。明恵のように宋の文化を理解する僧が慶派の新様式を支え、その仏像が明恵の厳密の思想を視覚的に支える存在だったと野村氏は結論づけている。

四章は明恵の伯父でもあり、当初佛道及び歌道の師でもあった上覚を、明恵が結局は法門の師ともせず、和歌観も相違するようになった事を「仮名行状」から導き出し、明恵の和歌観が「下化衆生」のためのものとする点で他の歌人とは場を異にしていたことを『入解脱門義』によって述べている。

五章は明恵が地獄蘇生譚『能恵法師絵』制作を企図する人物として最もふさわしいことを東大寺尊勝院を媒介として考証したものである。

六章は『古今著聞集』に明恵説話が収録される経路を推測したものである。『著聞集』の編者橘成季が家司として仕えていた九条家もしくは西園寺家の人々と明恵は緊密な関係にあったことを指摘し、成季は明恵を法然とともに「只人にあらず」と評して尊敬しているが、『伝法絵』に基づいた法然の伝記と異なり、伝記を披見しえなかったが故に逆に生命力あふれる明恵説話を創造できたと述べている。

七章は明恵説話の受容の例として、明恵が春日明神の神託によって渡天竺を断念した内容の謡曲『春日龍神』を取り上げ、その出典と成立を考証したものである。在来の説が出典を明確にしえなかったのを『漢文行状』がより近似していることと、表現の典拠に『法華経』があることを指摘している。

第Ⅱ部「明恵——修行と著述——」は明恵の生涯にわたる精神の変化を考察した論考を集めている。全5章、一「明恵の捨身行と言葉」、二「明恵の自署」、三「明恵作『華嚴唯心義』試論——引用典籍をめぐって——」、四「明恵作『大方広仏華嚴経中唯心観行式』試論」、五「明恵作『随意別願文』試論——『悲華経』と弥勒信仰をめぐって——」から成り立つ。

一章は明恵を特徴づける実践的な捨身行が少年期・神護寺入寺後の青年

期・高山寺定住後の三期で質的变化を伴いながら晩年まで積極的に肯定されていたことを主張し、捨身行を支えていた一つが華嚴経であったこと、行の積極性の因を彼の資質と出自から考察したものである。

二章は50種にも及ぶ明恵の自署を含む識語の種類のに注目した論である。彼の著述・書写典籍などの識語について調査して、それを彼の生涯と結びつけ、青少年期の紀州遍歴期までの「成弁」時代のものが変化に富む長文を以て自らの感情を直接表現していたのが高山寺定住期以後行動の安定性が見られる「高弁」時代には変質していることを述べている。

三章は華嚴経の唯心偈が紀州遍歴期の精神的な支えになっていたことを考証し、建仁元年(明恵29歳)の著作『唯心義』の引用典籍を調査してかれの青年期の思想が華嚴宗の主流をなすものと一致していることを指摘する。

四章は建久九年(明恵26歳)成立の講式『唯心式』の出典探索を中心とした詳細な解説と、成立の背景について考察したものである。若年時、師範に恵まれない状況を意識して文殊・普賢菩薩を師として修行していたが紀州遍歴の修行と研鑽により知恵と修行が満足すべき状況に達したとする自覚と自負が『唯心式』ならびに『別願文』の著作となったと述べている。

五章は『別願文』全三段の詳細な解説と、そこに見られる弥勒菩薩信仰の特殊性および釈迦信仰を支えた『悲華経』との関わりを論じたものである。

第Ⅲ部「明恵伝記の研究」はともに「明恵上人伝記の研究」と題する3章から成り立つ。ともに高山寺資料叢書『明恵上人資料』第一に見える奥田勲氏の解説の補完と訂正をなしたものである。一は「『仮名行状』と『最後御所労以後事』」、二は「建仁三年春日大明神降臨を中心として」、三は「『仮名行状』と『漢文行状』」なる副題を付してある。

一章は『仮名行状』とその抄出本『御所労事』とを比較し、相違点を考察することで、『仮名行状』は著者喜海が明恵教団の継承者としての正統性を宣言する書という一面を有していたことなどの成立背景を推測した論である。

二章は明恵の渡竺についての春日明神降臨第一回のことを記した『明恵上人神現伝記』・明恵自著『秘密勸進帳』『十無尽院舍利講式』と『漢文行状』(現『仮名行状』は中巻欠)との相互関係を考証した論である。最初に『講式』が、二年後に『勸進帳』が成立し、『行状』の著者喜海は両書を参照して『行状』を記述したこと、最も詳細な『神現伝記』はそれらと直接の関係

は認められないことを指摘する。

三章は奥田氏解説が『漢文行状』は『仮名行状』を省略漢文化して成立したとする論に異を立て、かなり多くの付加が見られること、その部分に教団の急速な質的变化や合理的な明恵像造型などの『漢文行状』の編集意識を推察することができるかと主張する論である。

第四部「明恵と夢」は全5章、一「明恵上人の経袋」、二「明恵——観行と学問に生きる——」、三「明恵と夢」、四「明恵上人と高山寺藏『夢経抄』——抄出文献の検討——」、五「明恵と一行説話——明恵の夢の背景について——」から成り立つ。

一章は明恵が頸に掛けていた経袋には經典や鏡弥勒像・『御夢記』などが必要に応じて入れ替えられていたことを『神現伝記』『僧高弁所持聖教等目錄』などから考証し、その典籍の性格の分析の必要性を提言した小論である。

二章も小論である。『却廢忘記』等により現実と夢想とを区別せず学問よりは行を重視し、行業は観行に重点を置くべきこと、東大寺の華嚴学に絶望していたことを述べている。

三章は明恵の生涯における夢との関わり方の変遷とその理論的背景を考察した論である。「明恵にとって夢と関わることは宗教的行為そのものであった」とする視座から、明恵自身が儀軌に従って夢を意図的に見ており、隆弁ら弟子は明恵を夢の感得法や透視法について超能力の持ち主としていたことを述べている。一方で『摧邪輪』制作時に瑞夢を見ながら奥書に載せていないことを正理と夢とは明恵の中で明確に質的相違が認識されており、理論書である『摧邪輪』に記すことを意図的に避けたと推測している。

四章は『夢経抄』に引用された夢に関する諸經典の出典考証である。

五章は『宝物集』『平家物語』など中世の多くの作品に見える一行流罪・曼荼羅感得説話を記す『梵天火羅九曜』が明恵の周辺にあったことを考証し、一行の事跡に関心を抱いていたが流罪説話には関心を示していないことに留意している。

第V部「資料編」は明恵および伝明恵作とされる講式二つの解説と翻刻である。「明恵作『俱舎講略式』試論——解説と資料紹介——」「伝明恵作『阿難尊者講式』試論——解説と資料紹介——」の2章から成り立つ。前者の解説は明恵が東大寺で俱舎を学んで建久三年に『俱舎講略式』を作成し、神護

寺を中心に法式を行ったことを推測している。後者は日本における阿難説話を通観し、明恵の日常会話に阿難の名は頻出するが、『阿難尊者講式』は天台五時教説ほかの点で異宗的な思想・表現があり、『華嚴經』を信仰の中心とする明恵作とする伝承は疑問があるとするものである。

### 論文審査の結果の要旨

「論文の性格」でも述べたように、明恵の研究の大勢は基礎的資料の整備が一段落し、新しい世代による第二段階の萌芽はあるものの、伝記や著作については第一段階の研究者が総体的になした基礎作業の成果の補足と訂正をなすことが当面の主要課題となっている状況である。その作業は当然の事ながら新しい理念や方法に基づいて対象についての観念を新たに組み立てるような体系性を成果の表面には見せないことになる。野村氏の論文が全体としての包括的な体系性を際だった形では見せないのはその意図からすればやむを得ないことではある。それ故、二十数年間に亘る研究業績を五部に分類してこの形にまとめ上げた手際に乱れが無いとは言えない。例えば明恵の伝記を支軸として第Ⅰ部二・三・四章と第Ⅳ部一・二・三章を以て章を立てる方が、説話や夢による章立てにこだわって分属させるよりは自然である。また、各論考がそれぞれ独立した形で異なった発表場所で公表され、それが論文本体はほぼ初出のままに収録されたため、論旨の重複がまま見られて、それが一種の煩わしさを招いていることも否定できない。

しかし、そのことは野村氏の明恵像の把握に一貫性・体系性が欠けていることを意味するのではない。論文内容の要約の冒頭でも触れたように野村氏の明恵の生涯における基本的なイメージは第Ⅰ部一章（初出は1977年）の初期の研究成果から第Ⅳ部三・四・五の最近の業績に到るまで確乎として一貫しており、矛盾撞着はない。明恵が出発点において伯父上覚に失望し、心服するに値する師も見いだせず依るべき経論も知らないままに一途に思い詰めたような捨身の行動をとった一種の欠如意識が、後に紀州遍歴期においても説話の主人公を師として修行をなさしめたり、行動の規範を自身の夢に求めて、その夢が経典の規範にのっとっているか否かを確認するために経典を抄出する作業をなさしめ、その意識が高山寺入寺以後も変質しながらも引き続いていたと野村氏は明恵の生涯を把握しているのである。

本書の基調は実証的な資料考証、特に出典探索にある。その性格は論考の

発表年次を逐うごとに度合いを増してゆき、発表年次の最も新しい第Ⅱ・Ⅴ部の「試論」シリーズでは大正蔵経を中心とする出典探索などに不断的努力による並々ならぬ蓄積が反映されていることが窺われる。このことは必ずしも研究条件に恵まれているとは思えない野村氏の現職を考慮すれば、敬服に値することがらである。ただその精細な実証が足かせとなっている個所がなくはない。例えば第Ⅰ部五章の論証過程は極めて着実であり、その結論は説得的であるが、二章で媒介者を想定して明恵と鴨長明の直接の交遊関係があったことを推測する個所には何がしかの飛躍を感じざるを得ない。同様の飛躍が同部第六章中で橘成季が明恵について精度の高い情報を『古今著聞集』に収録できた経路を成季が親交のあった藤原孝時が明恵と直接交友関係のある藤原孝道の子であったことに求める点にも見られる。また中世の言葉の意味の誤解や、經典名についての誤記も稀にはあるが見受けられた。あるいは明恵の浄土教観や弥勒信仰についての理解に不十分な点もあり、明恵と後鳥羽上皇の繋がりが承久の変などを引き起こす結果を招いたことや快慶などのつながりの意味について教理以外の面への考察が及んでいないなど、仏教学・歴史学的な視座からは不満があることも否定できない。

このような瑕瑾はあるものの、野村氏の論文は全体として明恵に関する国文学を中心とした現在の研究状況をよく網羅消化し、その上にたって先行の説に対して多くの補足修正をなし得ており、今後も同様の研究成果を世に問う能力を有していると見られる点で高く評価することができる。よって審査委員は一致してこの論文を博士(文学)の学位を授与するに充分なものと認定した。また12月6日午後4時30分から審査委員全員により野村氏に対して論文内容につき口述試問を行い、関連領域・語学について試験をなした結果、同氏は博士(文学)の学位を授与されるにふさわしい学力と識見の持ち主であると認められた。



氏名(本籍)	草野 顕之 (福岡県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	乙第47号		
学位授与の日付	2003年3月19日		
学位授与の要件	学位規程第3条第2項		
学位論文題目	戦国期本願寺教団史の研究		
論文審査委員	(主査) 博士(文学)[大谷大学] 教授	大桑	斉
	(副査) 文学博士 [京都大学] 教授	大山	喬平
	(副査) 博士(文学)[大谷大学] 教授	神戸	和麿
	(副査) 博士(文学)[大谷大学] 名誉教授	名畑	崇

## 学位請求論文審査要旨

### I 論文の位置と性格

日本中世史研究、とくに戦国期研究において真宗史は、一向一揆・寺内町という課題を中心にいま盛りである。一例をあげれば、最新の中世史のシリーズ『日本の中世』(中央公論新社)では、第11巻に「戦国乱世を生きる力」(2002年8月刊)と題する一冊を配当し、戦乱の中での「民衆の知恵と力」を「信心を中心に描く」というように、真宗史を焦点化している。この著者神田千里は他に、一向一揆・石山合戦と真宗信仰を戦国社会の内に位置付ける著書三冊を著わし、それらが戦国期真宗史研究の主流となっている。これらが一般史の視点による外部からの研究であるのに対して、本願寺派の金龍静などを代表とする教団内部からの研究も活発で、本論文もまたそのような内部の視座からの研究に位置付けられる。戦国期教団の内部構造を、儀式を媒介とした教団内身分から捉え返す本論文は、内部からの、ユニークな視座によって、戦国期真宗史研究に新しい領域を切り開いたものということが出来る。

論者は、大谷大学史学科日本仏教史学分野の生抜きの研究者であり、昭和56年に最初の論文を発表して以来、戦国期本願寺教団史研究に携わってきた。

近年は山科本願寺遺跡の土塁破壊に対し、その保存と研究の市民運動の中心となって活動している。あるいはまた仏教史学会・日本史研究会などを舞台に、内部からの真宗史研究の中心となって活動を続けている。今度の学位請求論文は、そのような研究活動から生み出された個別論文の内から、主題に即した論文を選んで改定増補、章題変更をおこない、さらに新稿を加えて三部に編成することで、全体を統一している。このことによって、一つの主題の下で論者の主張が鮮明に展開されたものとなっている。

## Ⅱ 構成と概要

全体を見通すために、目次の章題を最初に提示しておく(節は省略)。

### 序論

#### 第Ⅰ部 蓮如教団形成の諸問題

第一章蓮如の生涯／第二章「寛正の法難」について／第三章「無碍光宗」について／第四章蓮如と講・寄合について／第五章蓮如の文化的背景／第六章山科本願寺・寺内町の様相／第七章創建時山科本願寺の堂舎と土塁について／付論 真宗史からみた寺内町研究

#### 第Ⅱ部 戦国期本願寺教団の形成と展開

第一章戦国期本願寺直参考／第二章戦国期本願寺坊主衆組織の一形態—「定衆」「常住衆」の位置—／第三章戦国期本願寺一家衆の構造／第四章一家衆の地域的役割—順興寺と枚方寺内町を中心に—／第五章本願寺家臣下間氏について—その発給文書の分析から—／第六章近世本願寺坊主身分の一考察

#### 第Ⅲ部 戦国期本願寺儀式の形成と展開

第一章本願寺の堂舎と荘厳の変遷／第二章戦国期本願寺教団における年中行事の成立／第三章『永正十七年元旦ヨリ儀式』について／第四章戦国期の本願寺教団と天皇／第五章本願寺末寺年中行事の成立と意味

### 結論

本論文は、蓮如期の本願寺門徒拡大の要因を探る第Ⅰ部、その門徒集団が実如・証如期に身分的に編成されて教団の組織と制度が確立する様相を解明する第Ⅱ部、その組織化の媒介となった儀式の年中行事としての成立を考察

した第Ⅲ部、というように有機的に編成されている。中でも、第Ⅲ部の儀式論は他の追随を許さない独自性を持ち、この儀式論が基本にあって第Ⅱ部の身分論が展開されるという関係にある。その意味で儀式と組織制度という、いわば教団の内部組織論であり、その成立過程論である。第Ⅰ部の蓮如期の諸問題は、教団組織化の前提と位置付けられ、諸制度の萌芽が探られるが、やや傾向を異にし、とくに寺内町関連の六・七章や付論は組織論とは別の独立性の強い部分である。けれどもこの部分は近年論者が最も力を注いでいる領域で、そこから教団と社会の交錯を捉える方向への接近が見られる。このように本論文の全体構造を捉え、以下に主要な内容を、各部ごとにまとめて紹介する。

### Ⅲ 内容の要点

#### 序論

「教団」と「教団史」の概念規定と、当該問題の研究史を述べる。「教団」とは「統一原理」をもって共通の宗教活動を行なう「組織と制度」を有するもので、その背景となる「教団意識」と「組織と制度」の統一的把握として「教団史」がある。そのような意味での教団史研究はこれまできわめて少なく、金龍静の「卅日番衆」、早鳥有毅の「頭制度」の研究によって、ようやく戦国期本願寺教団の組織と制度の解明が始められた。しかしその成立の時期と要因に関して問題が残されている。組織化は蓮如期ではなく実如期に求められ、証如期において諸身分が宗主のもとに一元的に編成されるが、それを推進した要因が儀式の整備であった、というのが全体を見通す視点となる。

#### 第Ⅰ部 蓮如教団形成の諸問題

この部は、蓮如期における人的・地域的教団の拡大の要因を考える前半の五章と、山科本願寺の様相を究明する後半三章に大きく分かれる。前半の教団拡大要因論の最も重要なものは、初期に蓮如が掲げた「婦命尽十方無碍光如来」の十字名号である。叡山の本願寺破却の名目は「無碍光宗」を建て「勸愚昧之男女示卑賤老若」という二点に集約される。そのうち「無碍光宗」という名称は一般的には必ずしも非難の文脈で用いられたわけではなかったが、五山禅僧たちによって中国の白蓮教に類比されて邪教を表わす言葉となり、一方の愚昧の男女に勧め示すという非難は「軽蔑神明和光」を内容

とするもので、死穢を忌まない門徒が、神社を汚したという白川神祇伯の激しい憎悪から、公家社会での本願寺門徒不浄観が明らかになった。こうした背景で邪教にして不浄の「無碍光宗」という叡山の非難が生まれた。これに対して仏光寺・専修寺などは「無碍光宗」にあらずと主張し、専修寺真慧は親鸞末流よりも善導・法然の存在を強調して浄土教の一流に位置付けた。叡山からの非難は、「無碍光宗」が門徒の結集要因であったことを示すもので、それは親鸞が無碍光仏を「人法としてよく障ふることなき」(教行信証・真仏土巻)と規定したことを受けて、蓮如もまた無碍光仏は「人法トシテヨクサフルコトナキ」(正信偈大意)というように、倫理や道徳、領主の法を超えると説かれることで、「無碍光宗」は人々を蓮如の下に結集させる要因となった。

門徒結集の第二要因に講があげられる。近年、藤木久志によつては、蓮如教団や一向一揆を支えた村落規模の地域的な結合体としての講は認められないと主張されたが、講とは呼ばれなかったにしても、道場・寺院に会合し寄合う門徒の集會が相当に展開していた。蓮如の「講」という言葉の使用例は二点のみであるが、それは吉崎における毎月兩度の命日の法會をさし、また「毎月兩度講衆中」宛お文(4-2)の本文に「毎月兩度の寄合」とあるように、講は「寄合」「會合」といわれるものと同義であった。本福寺跡書にも「毎月兩度の御講」が知られる。それらの「寄合」「會合」は、村落で踏襲されていた寄合の宮座が座次の上下や盃の先後の秩序によるものであったのに対し、そのような秩序を否定して信心の寄合とするもので、その平等性は、室町文化の「寄合」の精神を基盤とする。蓮如は能・茶の湯・連歌などの室町文化の伝播者でもあり、「寄合」の會所の押板形式の座敷とその飾りが、真宗の道場の形式・莊嚴に大きな影響を与えた。

第I部の後半は山科本願寺論である。最初に、蓮如が本願寺再興に山科を選び、それが可能となった理由を考える。寺地選定は金森道西の予言として語られているが、それは何故山科かという問いに答えるものではない。蓮如は「京都ハ本来本所」といい、山科本願寺完成後にこれを「京都本願寺」と呼んでいるように、本願寺は京都にあるべきものと考えていた。その京都で、親鸞廟堂の故地を西方に拝することが出来るのが洛東の山科であった。表向き本願寺住持となった順如の幕府接近、蓮如の本願寺勅願寺説による朝廷接近、これらは叡山の圧力を回避する方途であった。こうして朝廷・幕府・叡

山の黙認を得て再建された山科本願寺は、現存絵図に見られるような三重の土塁に囲まれた厳重な防御施設を備えたものではなかった。山科建立のお文には土塁のことが一切見えず、「普請作事ツイ地」とあり、また「蓮如上人仰条々」に「板ヒサシ」の語がみえることから、本寺部分を囲む方形の築地塀があったと判断される。また「山科八町」と見えることが寺内の八つの町と解され、町場の存在の根拠となっていたが、それは本坊部分の面積八町を意味すること、さらには蓮如・実如の葬送時の町蠟燭の数から蓮如段階では本寺以外に町場が想定できないこと、などによって、蓮如期における寺内町の形成説は否定される。けれども『空善聞書』に蓮如の往生直前に「マハリノドイヲ御覧」とあって、この頃には土塁に変更されていた。さらにその後、永正十年前後に見える「普請」が、現在に遺構が残る第二・三郭の土塁工事と想定され、この頃から土塁に囲まれた寺内町が形成されたと考えられる。

## 第Ⅱ部 戦国期本願寺教団の形成と展開

この部では、戦国期本願寺教団の「直参」「常住衆」「一家衆」などの坊主身分、侍衆下間氏の考察によって、教団の内部構造を明らかにする。

まず「直参」について。本願寺門末は、本願寺に直結した「直参」と、それに所属する「門徒中」に弁別される。「直参」は、個人の他に、「河野十八門徒」などのように「衆」を形成し、卅日番衆として本願寺へ勤仕して齋の頭人となることにおいて「直参」身分とされ、「坊主」と表記される。俗名で見える直参衆も知られるが、その多くは「入道」を称し、道服の着用を許されて法体として勤仕した。「直参」に属する門末は「坊主分」と表記されて区別された。「直参」の寺院・道場は親鸞御影を安置して地域門末の中心となり、月に五度の出仕の報謝行を核とする信仰規範が生み出され、地域教団が形成される。直参衆はその宗教役の勤仕とともに、安置した御影への勤仕方法を習得するためにも本願寺での様々な儀式に参加しなければならなかった。このようにして、本願寺への役勤仕を行なう直参、その直参へ役勤仕する門末という教団構造が形成された。

本願寺で勤められる歴代命日齋・申齋・本願寺主催齋の三種の齋に同席し、正月二日の謡初を勤め能に翁を舞う「定衆」「常住衆」という存在が知られる。彼等は地方の直参大坊主である。大坂移転直後はその寺中的存在であった大坂六人坊主が勤めたが、これに代えて証如が任命した。そのような「定衆」「常住衆」は直参身分の筆頭として本願寺に常住している。天文十一年

には名称が「常住衆」に統一され、同時にこれとは別に十一月二十八日の齋にのみ参加する「定衆」という身分が新設される。ところが天文二十一年から「常住衆」が見られなくなり「定衆」のみに変化する。つまり直参衆の内に、本願寺に常住して齋に同席する直参筆頭の「常住衆」という身分が生まれ、次いで「常住衆」の下位身分として「定衆」が分化し、さらにその区別が廃止されるという変遷をたどる。それは齋の座次を介して身分を教団内に観念させるものであった。また「常住衆」の謡初への参加は、幕府年中行事の謡初において「一番の番頭」が將軍と交盃式を行なうが、それと同様な意味を持つと考えられる。また能における翁の舞は、それが元来寺内住人の宗教行事役であったことに淵源する。これらは本願寺が修正会を年中行事に取り入れたのと同時に始まるもので、修正会が国家安泰の祈禱を本来とするところから、その導入は本願寺の祈願所としての性格、武家的寺家的性格を教団内外に強く打ち出すものである。このような直参身分の形成は、卅日番衆や頭制度という宗教行事役を媒介にした坊主衆のヨコの編成であったのに対して、「常住衆」は儀式を通じて身分を宗主に結びつけるタテの編成原理であった。

本願寺教団組織を考えるいま一つの問題は一家衆という存在である。本願寺宗主の親族を言うが、その編成原理に関しては早くから議論があり、森岡清美の、血縁ではなく系譜関係による編成という論を基本としながら、諸説がある。永正十六年の一門一家制によって、系譜と男系血縁により実如・円如の連枝一孫を一門、その他の庶子を一家とする原則が成立した。しかしこの原則で説明できない一門が存在する。それを説明し得る原理として、一門の条件には教行信証伝授・相伝があることを明らかにし、一門一家制度は教義相伝身分確定の目的を持つと考えた。

そのような一家衆が地域教団において担った役割を解明するため、枚方寺内町における一家衆順興寺の実態を究明した。順興寺の内部組織は本願寺を手本に主従関係として編成され、儀式執行のために御堂衆や常住衆も存在していた。門徒団は、証如命日の十三日講と親鸞命日の二十八日講に組織され、仏事と齋が催されていた。それ以外にも門徒の有力者「長衆」などによる齋が数多く催され、門徒との密接な関係が築かれていた。枚方寺内は、蓮如の末子実従が入寺する以前から、実如開創の坊舎を中心に成立し、独自の寺内組織を有して対外交渉を持っていたが、実従もまた周辺の反対勢力と交渉を

もつなど、順興寺は寺内の安全確保のために重要な役割を演じていた。

次に、本願寺独自の文書形式である印判奉書の形式成立と変化や意味を分析する。親鸞に随伴した蓮位坊を祖とする下間氏は、御影給仕の職務を世襲し、これを根拠に懇志受取状を発給する。本願寺の門跡成とともに坊官の地位に着くと、その発給する懇志受取状は、書札礼に準拠した印判奉書の形式を取った。その印判は、戦国大名の印の系譜と考えられてきたが、むしろ律令制の僧綱の印の系譜に属するものと考えられる。印文「明聖」と「詳定」の二種があり、前者は奏者役の発給文書に用いられる本願寺の公印で、東西分派以降は西派の印となる。後者は天満本願寺時代から下間頼廉・頼龍の発給文書に用いられた教如の私印で、東派の印となる。石山戦争という状況の中で、本文中に本願寺の様態を示す文言、法語文言が付加され、本願寺独自の様式へと変化してゆく。天正十三年から奏者添状と取次添状が加わった三点一組のものとなるが、それは懇志受取の収納機構が成立した事と対応するものである。このように、印判奉書の形式は、本願寺家臣組織、特に奏者・取次による懇志収納機構の成立と密接に関係するものであることが明らかになった。

戦国期本願寺教団組織は、近世において大きく変貌する。そのことが定衆と御堂衆の座次争論に見られる。直参衆の身分系列である定衆に対して、一家衆の身分系列に属する御堂衆は、本来系列を異にする身分で、両者の座次争いは戦国期では考えられない。本願寺門跡成によって、一門身分が院家と内陣に、さらに余間という寺格が加わって三官の制度が成立し、礼銭昇進の途が開かれたから、定衆という身分自体が意味を失い、坊主支配が成り立たなくなった。また戦国期の教団編成に重要な意味を持っていた番頭制度が、懇志代納によって形骸化したため、それに依拠していた定衆の役割も消滅するに至った。その一方、教学への関与を強める事で御堂衆の地位は上昇した。これが座次争論を引き起こしたのである。その根本には、宗主に結びついた戦国期の身分制度から、門跡成によって天皇との距離が身分の基準となるといふ教団編成原理の変化が想定される。

### 第Ⅲ部 戦国期本願寺儀式の形成と展開

第Ⅱ部から、戦国期本願寺教団の身分組織が儀式を媒介にして成立しているという見通しが得られる。そこで第Ⅲ部では、儀式そのものの成立を問題とし、その画期となった新史料『永正十七年元旦ヨリ儀式』の紹介と分析を

中心とする。それに先立つ前提として、儀式の場である本願寺堂舎の整備過程と年中行事の成立過程を押さえる必要がある。存如時代に両堂形式が成立したことはほぼ確実で、山科本願寺で現在に通ずる形式と荘厳が整備された。すなわち御影堂は詰敷きの畳に押板形式の内陣を持ち、卓を置いて三具足と灯台を飾るもので、これらは軸装の本尊や絵像の関係で、室町文化の特色である書院造の座敷飾を取り入れ、それによって浄土教系諸宗派との違いを視覚的に伝えるという意味で、蓮如にとって重要な改革であった。また明応末年から鶴亀の燭台が見られ、『永正十七年元旦ヨリ儀式』には御真影の前の打敷と水引の併用、金灯笼の使用などが知られるが、これらは、室町幕府同朋衆相阿弥に内陣荘厳の相談をしている史料の存在によって、書院造の座敷飾の摂取が積極的になされていたことを示す。一方年中行事の成立時期は明確を欠くものの、儀式と関連の深い卅日番衆や頭制度が、永正二～九年には成立しており、常住衆の身分の成立も実如期であることから、やはり同じ永正期と考えられ、『永正十七年元旦ヨリ儀式』はこうした動向を踏まえて円如による教団編成強化の改革の一環として成立した。その筆者は、御堂衆の一老であった端坊明誓を有力な候補としたい。

このような儀式・年中行事の成立には、天皇・公家という権威集団との交流が不可欠である。永正錯乱という事件で宗主権を脅かされた実如は、聖教目録を作成して教義独占を図るとともに、青蓮院へ接近して香袈裟・紫袈裟を免許され、勅願寺となる。この延長線上に証如・顕如による朝廷接近があり、門跡成を契機に三部経読誦を中心とする勤行や行道の作法を導入する。こうした時、戦国期天皇権威が一つには官位叙任権として、一つには在地共同体の神に対する優越的権威として存在したという脇田修の天皇観に随い、前者が本願寺の権威化に、後者は門末の百姓王孫意識を、天皇権威と結びついた本願寺・在地末寺に吸収する機能を果たしたと考えた。

## 結論

本願寺の教団編成は何を背景に進められたのかが問われねばならない。本願寺宗主との対面を軸に直参身分が編成されたことは、王孫と意識した直参衆が王に連なる公家本願寺宗主に直参することであった。この編成原理に随えば、本願寺は必然的により高位の地位を求めて動かざるを得ない。こうした方向性は、蓮如期における本願寺勅願所説の表明や、子女を公家に配することでの公家社会への接近に見ることが出来る。しかしながら蓮如期には儀



式と結びついた直参身分の創設やそれによる教団編成原理は認められず、両者はいまだ結びついていない。しかし蓮如期に始まった平座・同座の慣行が、齋の席で宗主との同座につながったように、拡大した門末把握には蓮如の理念が活かされて、身分編成の原点となった。

#### Ⅳ 評価と問題点

本論文は、日本中世史の学界に重要な問題となっている本願寺教団を、その組織と制度に関して、教団内部に視点を置き、儀式と身分という観点から明らかにしたもので、このことが最大の特色であり、最も評価すべき成果である。新たな視点によって見出された新たな問題群を、宗内史料を博搜して史料批判を加え、一般史料と突き合わせる緻密な考証は、容易に反論を許さないものであり、幾多の歴史的事実を明らかにしたことは高く評価してよい。すでに紹介したが、改めて確認すれば、第Ⅰ部においては、「無碍光宗」に関する考察、「寄合」「会合」を講と見る説、山科本願寺築地堀説、土塁寺内町実如期以降説、第Ⅱ部においては、番衆・齋頭人と直参衆身分、その筆頭としての常住衆、一家衆教義相伝身分説、書札札による印判奉書様式論と二種の印文の機能解明、第Ⅲ部においては、『永正十七年元旦ヨリ儀式』の発見と解明、本願寺並びに末寺の荘厳や年中行事の解明、などがあげられよう。これらの新見解は、現今ではほぼ定説化しつつあると言ってよく、その意味で本論文は戦国期本願寺教団組織論の一つの到達点を示しているともいえよう。そこから導かれ、全編を通じて主張される本論文の要である、儀式を媒介にした身分編成説は、学界を主導する学説としての説得力を持つものである。

最後に、さらなる研究の深化を願って若干の注文を付けておきたい。本論文は本願寺教団「史」という題名のもとになされた本願寺教団組織論であり、宗主による上からの編成論である。そこには論者の「史」に関する認識の問題がある。序論で、「教団史」は、「教団意識」と「組織と制度」の統一的把握であるというが、その「教団意識」への言及はともかくとしても、背後にある歴史の動向が「教団意識」と交錯して教団編成原理を生み、逆にまた、形成された組織が歴史に働きかけるという相互ダイナミズムの把握が教団「史」であろうと考える。例えば、信仰が組織を持ちそれを確立強化しなければならなくなったとき、信仰以外の要素を加えてゆかざるをえないところにおこる相克、様々に試行錯誤し選択する葛藤、その結果としての組織論、

こういう視点が望まれる。あるいは、表題にある「戦国期」という時代が、研究を通じて明らかにされ、逆に「戦国期」がいかに教団形成にかかわったかという問題といってもよい。これらが平板さを克服する道であろう。また論理的考察が深められる必要もある。例えば儀式を論ずるには、とくに教団内部の視点からの研究である以上、そもそも真宗において儀式とは何かというような、基本的問題が考えられるべきである。「蓮如期に拡大した教団を如何に蓮如の理念を生かしながら統一的に把握するか」という課題のもとに教団編成がなされたという結論なども、論文本体での主張から飛躍があり、より厳密に考えられる必要があると思われる。

二月二十日に審査面接並びに語学試験をおこない、審査委員の協議の結果、本学博士(文学)に相応しい論文と判断された。

氏名(本籍)	さくら い とも ひろ 櫻井智浩(福井県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	甲第24号		
学位授与の日付	2003年3月18日		
学位授与の要件	学位規程第3条第1項		
学位論文題目	チベット注釈書による『入菩提行論』般若章の研究		
論文審査委員	(主査)	文学博士 [大谷大学] 教授	小川一乗
	(副査)	文学博士 [京都大学] 教授	一郷正道
	(副査)	博士(文学)[大谷大学] 講師	片野道雄

### 学位請求論文審査要旨

#### 【論文の性格】

大乘仏教の基本思想である龍樹の空性思想を祖述する中観学派には、Candrakīrtiを代表とする帰謬論証派と、Bhāvavivekaを代表とする自立論証派とがあるとする教判が、チベット仏教において成立し、帰謬論証派の中観説が大乘仏教における最も勝れた思想と位置づけられている。そのチベット仏教において、Śāntideva (650-700)は、その主著 Bodhicaryāvatāra (BCA, 『入菩提行論』)によって帰謬論証派の系統に属する学僧とされ、そのBCAが重視されている。しかし、そのように確定されていることを問題視する研究が最近になって提示されるようになった。それはBCAと同一起源とされ、BCAの初期本とされる敦煌出土の Akṣayamati 造 Bodhisattvacaryāvatāra (BSA, 『入菩薩行論』)の発見により、そのように確定されていることへの比較文献学的な面からの再検討が始まったからである。

そのような新たな研究動向の一環として、特に、Candrakīrtiの中観思想における八つの特異な見解、これがチベット仏教において帰謬論証派の特色ともなっているのであるが、その中の「究竟一乗という立場から、声聞独覚を含む三乗すべてに法無我への了解がある」という【学説】と、それに関わる「空性の修習」の説示の意義、「比丘性」をめぐる議論などについて、論

者は、BSA と BCA との「般若章」で比較検討している。この作業において不可欠といえる BCA の諸注釈書における解釈の変遷についても詳しく検討しているが、特に、BCA に対する最も重要なチベットの学僧ダルマリンチェンの注釈書 (GS) を主として検討している。それによって、改めて BCA の持つ意義を問い、チベット仏教において BSA が流布せず、BCA が重視された要因を究明した論文である。

### 【論文の構成と内容の要約】

「論文の構成」については、詳細な目次が提示されているので、それによってその概略を知ることができる。

#### 序説

はじめに

『入菩提行論』に纏わる研究概観

概論におけるシャーンティデーヴァ観

個別研究でのシャーンティデーヴァ観

BSA の発見と、新たな課題

本論の方針

注釈書について

#### 第一部

『入菩提行論』般若章の比較研究ノート

はじめに、テキスト・翻訳篇、分析

#### 第二部

チベット撰述注釈書を中心とした BCA の研究

第 1 章 BCA の文脈構造についての GS の見解

第一節 はじめに

第二節 GS の科文から見た BCA の構成

第三節 BSA/BCA の成立問題の検討における GS の科文・内容の有用性

第四節 BCAIX 後半についての総論的見解

第五節 サーンキャ、ヴァイシューシカ批判について

第 2 章 BCA と人法二無我説の関係

第一節 はじめに

- 第二節 シャーンティデーヴァの位置づけ
  - 第三節 人法二無我と煩惱、所知二障
  - 第四節 声聞独覚における法無我理解
  - 第五節 【学説】の根拠としての「空性の修習」
  - 第六節 GS から窺えるシャーンティデーヴァの思想的意義
  - 第七節 まとめ
- 第3章 空性の修習の階梯
- 第一節 BSA と BCA の構成比較
  - 第二節 BCAIX32をめぐる問題
  - 第三節 空性の修習の階梯に対する GS の解釈
  - 第四節 小結
- 第4章 『入菩提行論』の大乗仏説論争
- 第一節 問題の所在
  - 第二節 大乗仏説非仏説論のもつ意味
  - 第三節 大乗仏典における大乗仏説論争概観
  - 第四節 BSA における大乗仏説論争
  - 第五節 『入菩薩行解説細疏』の解釈
  - 第六節 BSA における論争の傾向
  - 第七節 BCA における議論
  - 第八節 BCA 第二の仏説論争
  - 第九節 BSA/BCA の大乗仏説論の異同と問題点
  - 第十節 1 BCAIX41の注釈における引用経典
    - 2 BCAP における引証
      - 【般若経】
      - 【般若讃】
    - 3 その他のインド撰述注釈書
    - 4 プトンの引用—『宝徳藏般若経』—
    - 5 ツォンカパによる引用
    - 6 GSIX41における BCAP への言及
    - 7 小結
  - 第十一節 1 BCAIX43ab に対する BCAP の解釈
    - 2 第二の仏説論争偽撰の根拠

- 3 他のインド撰述注釈書の「条件」解釈
- 4 ソナム・ツェモの解釈
- 5 プトンによる解釈
- 6 ダルマリンチェンによる解釈

第十二節 大乘仏説論争の意義

第5章 比丘性をめぐる議論

第一節 比丘性をめぐる議論概観

第二節 「比丘性の議論」を巡る注釈

第三節 「比丘性の議論」—総論

第四節 「比丘性の議論」—各論

第五節 「比丘性の議論」—結論

第六節 小結

結論

BSA/BCAが【学説】を主張するという理解に到る経緯

注

「序説」においては、目次によって明らかなように、これまでのBCAとその著者に対する研究を概観し、新たに発見されたBSAと比較している。その上で、その両者には、チベット仏教において二学派に教相判釈されている中観学派の何れにも配当しうる思想が含まれていて、その二学派の何れかに確定できない。それなのに、BCAをチベット仏教の宗義書文献において帰謬論証派に帰属させているのは、チベット仏教における注釈書における解釈、特にGSの解釈が重要な役割を果たしていることを検討課題としている。

「第一部」では、上記の検討課題を進めていく基本作業として、BSA/BCAの「般若章」のテキストを、先行する研究業績に基づきつつ、比較文献学的に、サンスクリットとチベット訳を諸本によって確定し、その解読和訳を付している。BSAは92偈から成り、BCAは168偈から成っているが、それらを対比することによって、両テキストの独自性がすでに明瞭に窺える。このことについて、次のように分析している。

「BCA独自部分の考察を中心にBCAの概観を試みた。全体を通してみると、特に、BCA IX 57後半、人法二無我の具体的な内容の説示以降の部分

に増広と見られる部分が多く見られる。これらの部分はBSAには見られない。つまり、BSA/BCAの原型を想定した場合、後代での付加的要素とも見なされるものもあるが、その内容は、BSAにも共通するトピックに関して、その議論の徹底化を図るため、対論者の主張を取り上げつつ帰謬論証によって批判していくという意味での展開と見ることが出来る。したがって、BSAに比してBSAに説かれた要素をより詳細に説示するものであり、突然内容が飛躍して論の滞りを来すといった傾向は比較的軽微である。

これに対して、前半部分、特に空性の修習というBSA/BCAの主旨に関わるBCAIX32-56の部分には、大幅な偈頌の位置の相違、それに伴うと見られる偈の挿入が見られ、また比丘性の議論、第二の仏説論争等の前のトピックからの論理的飛躍と思われる箇所も散見される。この点は、後半部分の増広部分よりも、BSAとBCAの造論の意趣の相違を顕著に反映したものと考えられる。」(p. 134-135)

## 「第二部 チベット撰述注釈書を中心としたBCAの研究」

「第1章 BCAの文脈構造についてのGSの見解」では、まず詳細なGSの科文が提示されている。すでに周知のように、チベット撰述の文献は、その内容が一目瞭然に窺えるほどの詳細な科文(目次)が付されているのが常である。先ずこの科文によって、BCAIXを概観すれば、空性の実践方法を述べる部分(第2偈-第151偈)と、教誡部分(第152偈-第168偈)に大別される。量的にも明らかなように、前の部分がこのテキストの骨格であり、(1)「二諦の設定」、(2)「解脱のみを得たいと望む者であっても、空性を了解する必要性についての論証」、(3)「空性を証明する道理の詳説」とに分けられている。(1)では、経量部や唯識説への批判が、(2)では、本論で取り上げられている仏説論争や【学説】が、(3)では、実体論に立つインド哲学を論破し、人法二無我と空性への了解が説かれ、GSの特徴が最も顕著に示され、このために150偈の三分の二に相当する93偈が費やされている。

「第2章 BCAと人法二無我説の関係」では、【学説】は帰謬論証派の一つの大事な柱であるが、それに関わる基本的な問題が論究されている。唯識説の見解によって、煩惱障は人無我によって断除され、所知障は法無我によって断除されるとするのが一般的であるが、それに対して、人と法の二我

執を有染汚の無明である諦執とする帰謬論証派では、人法二無我によって煩惱障が断除される、すなわち、煩惱障を断除することによって人法二無我が了解されるという独自の見解に立って、声聞乗にも法無我があり、そのために空性が修習されなければならないという【学説】があるのである。これらの問題について、【学説】の原文を引用し、それを解説しつつ詳細に論じている。

「第3章 空性の修習の階梯」では、「習気 (vāsanā)」について検討している。ここで検討されているのは、jneya-saṃkleśa-vāsanā と śūnya-vāsanā である。チベット訳によると、前者については、BSA では「所知と煩惱の習気」とされ、BCA では「所知に対する煩惱の習気」とされている。この語義解釈については、所知障とは「所知=真実を了解するにあたっての障」と解する唯識説と、「所知=障」と解する帰謬論証派の見解の相違についても検討されなければならないであろう。後者については、「空性の修習」の反復を説く BSA に対して、そこに「空の習気 (śūnya-vāsanā)」という新たな要素が BCA には導入されていることに注目し、それに対する検討である。つまり「空性の修習」それ自体が「空の習気」となって否定対象となるという視点であり、そこに、帰謬論証派の基本的な特徴である絶対否定的な在り方が意図されていると指摘する。

「第4章 『入菩提行論』の大乗仏説論争」では、BCA には内容の異なる二つの大乗仏説論争が存在し、第一の論争(第42偈-第44偈)と第二の論争(第50偈-第52偈)とである。それを BSA における論争と比較するとき、BSA における論争と BCA の第一の論争とは内容的に一致している。それに対して、BCA のみにある第二の論争は、「甚深」なる大乗經典に対する理解の浅深による大乗非仏説の非難は当たらないとする内容であり、そこに仏説観の相違が伺われる。本章ではこの二つの論争について関係する諸文献を精査している。

先ず、大乗仏教を非仏説とする批判は既成仏教である部派仏教によってなされているが、大乗仏教からは部派仏教を非仏説と見なすことはなく、寧ろ、部派仏教の仏説性に基づいて、それとの共通性を示すことによって大乗の仏説性を証明しようとするのが普通である。従って、その大乗仏説論争においては、大乗側の仏説観には、部派仏教との差別化を図る要素と、平等性を提示する要素とが混在している。この大乗の立場から、仏説の平等性について、



BSAでは、「空性の修習」を奨励するのが大乘であるから、空性を説く大乘經典の仏説性が問題とされる。その論争は「正にこの道によって、菩提がある」(BSAⅧ31)という経言を巡って開始されている。ここで「この道」という経言について、BSAでは「この道」とは「空性の修習」であり、經典は大乘經典である。それに対して、部派仏教では「この道」とは、「四諦の現観」としての八正道などであり、經典は阿含であり、その阿含による「教法の相承」である。この「教法の相承」が大乘を非仏説として峻別するメルクマールとなっている。しかし、大乘の立場からは、「教法の相承」ということは釈尊によって説かれた縁起という法性と矛盾しない、尊敬されるべき「教法の相承」であり、それこそが仏説性であるとしている。

これに対して、BSAⅧ31に相当するBCAⅨ41では、「この道以外には、菩提はない」という経言となっている。このため、BSAでは菩提の道としての四諦の現観と空性の修習が共に尊敬されるべき教法として平等であるという平等性が主論であったのに対して、ここでは、空性の修習以外に菩提の道はないという解釈となり、声聞・独覚にも空性(法無我)への了解がなければならぬという点で平等であるという平等性となり、それが【学説】の根拠ともなっている。この両本の視点の相違が、とりもおさず両本の構成の違いにも影響を与えていると考えられるとする。

最後に、BCAのみにある第二の論争について検討され、それは後に挿入された偽撰であると見なすこともできるが、チベット仏教においては偽撰とみなしていないのが大方であることを見定めている。

「第5章 比丘性をめぐる議論」では、この議論の部分はBSAには存在せず、BCAのみのものであることが検討されている。この比丘性とは、煩惱障を断除して、仏果としての阿羅漢果を獲得することである。従って、煩惱障である諦執を断除する人法二無我の修習、すなわち空性の修習が比丘には不可欠であるから、比丘性を目指す声聞・独覚にも法無我があるべきであるという【学説】についての議論である。BCAにおけるこの議論の部分が、チベット仏教では重視され、BCAが帰謬論証派に帰属する論書とされる根拠の一つともなっている。この点について、チベット撰述の諸注釈書が検討されている。

「結論」では、【学説】とBCAとの関連について、BCAにはその素地が準備されているが、BCAが【学説】を主張しているという解釈の完成はチ

ベット撰述の注釈書、特にGSにおいてであると論じている。

### 【論文審査の結果と要旨】

本論文は、帰謬論証派の八難所(独自の学説)の中にあつて、仏道の差別化を取り除く学説という特異な【学説】を取り上げて、空性の修習をめぐるBSAからBCAを経てGSに到るまでの思想的変遷を究明することを中心的な課題とした研究である。

研究の基礎的作業として、BSA(VIII)／BCA(IX)の「般若章」と、それに関わるサンスクリットとチベット訳を比較検討した上で、三乗のすべてに法無我への了解がなければならないという【学説】を、チベット仏教がBCAの上に持ち込んだ経緯が究明されている。

その要旨は、1)空性の修習において空性の習気という語句による空性の絶対否定的な面。2)真実の教法の伝承という仏説性に関しての大乗と声聞独覚乗の平等性を論じる大乗仏説論争。その場合、両者の平等性をめぐって、次のような二つの平等性のあることが指摘された。すなわち、一つには、「正にこの道によってこそ、菩提がある」(31)というBSAの経言に基づいて、声聞・独覚乗の「四諦の現観」と大乗の「空性の修習」とがともに尊敬されるべき仏説として平等であるとする平等性。二つには、「この道以外には菩提はない」(41)というBCAの経言によって、「この道以外」を「空性の修習以外」と解釈したGSに代表されるチベット仏教の注釈に基づいて、三乗ともに法無我があるとする平等性。3)そのために、声聞・独覚乗における比丘とは何かを問い、煩惱の断滅という比丘性(阿羅漢)には法無我が不可欠であることについての「比丘性の議論」がBCAにおいて付加されていることなどについての検討である。これらの検討によって明かとなった点から、BCAがチベット仏教において重視された一つの要因を伺うことができる。

以上の論考は、チベット文献の精査による新たな成果である。インド仏教については、チベット仏教からの示唆に基づいた理解が多くあるが、その示唆がどのようにして形成されたのかを究明した、一つの研究成果として、十分に評価できる。更に、チベット仏教の蔵外文献(ここでは主にGS)は難解であり、その解読を試みた努力も評価に値する。課程博士請求論文としてその水準に到っている。

しかし、論文審査に当たり、論考の進め方と文章表現が十分に整理されていないため難解な論文となっていること、チベット蔵外文献についての読解に更なる努力が求められること等が今後の課題として指摘された。

氏名(本籍)	の 箕 浦 暁 雄 (三重県)	
学位の種類	博士(文学)	
学位記番号	甲第25号	
学位授与の日付	2003年3月18日	
学位授与の要件	学位規程第3条第1項	
学位論文題目	アビダルマ文献における心所論の研究 ——諸法の共存関係論証——	
論文審査委員	(主査) 文学博士 [大谷大学] 教授	小川 一 乗
	(副査) 教授	吉元 信 行
	(副査) 文学博士 [立正大学] 立正大学教授	三友 健 容

### 学位請求論文審査要旨

#### 【論文の性格】

世親の『阿毘達磨俱舍論』(以下『俱舍論』と略称)とその注釈書,ならびに衆賢の『順正理論』に基づいて,インドのアビダルマ仏教で展開した心所論のうち,十大地法の分析を主題としている研究である。心所法の中で,常に心と共に同一瞬間に生起するのが大地法である。諸存在は刹那滅であるが,「俱有因」については,「八事俱生随一不滅」といわれ,最低でも八事(八つの存在)は同一瞬間に俱生するとされている。その「俱有因」において,「二心併起を許さず」とされている心と,それと俱に生起する心所(心のはたらき)である大地法との関係について,また,同一瞬間に生起する諸法の中でも,特に心と心所との関係に適応される「相応因」について,それらの定義をめぐる様々な議論を通して共存関係論証の主要な論点を整理して明確化することを主たる目的としている。

さらに,十大地法を認めるか否かを含めた大地法についての諸議論を検討し,特に,大地法の一つである「想」は「nimitta(因相)の把握である」と定義されているが,そのように定義されている点に注目して,初期經典(Nikāya)における nimitta の用例を調査し,その意味を検討することによ

って、そのような伝統的規定が成立していることを提示した。

本研究は以上のように十大地法の共存関係を扱うものであるが、この論議の背景にある教義学の課題は、人間の心における善と不善と無記という在り方を問うものであると言える。このような関心から、心・心所の関係がどのように定義されているのかについて、様々な主張を検討・整理し、明確にしようとしている論文である。

### 【論文の構成と内容の要約】

「論文の構成」については、詳細な目次によって、その概略を知ることができる。

#### 第一部 研究編

はじめに

序論

1 研究概説

2 本研究において取り扱う主要文献

3 研究史

1 主要文献研究史

1. 『俱舍論実義疏』・『俱舍注疏随相』 2. 『順正理論』

3. 『五蘊論』・『五蘊論』諸注釈書

2 心所 (caitta) 論研究史

1. 取り扱う範囲と意図

2. アビダルマにおける心所論の位置づけ

3. 心所論研究の現在

第1章 俱有因・相応因について

1 俱有因の定義

1. 問題の所在

2. 俱有因の起源問題：諸法の共存から俱有因へ

3. 俱有因の定義内容

4. 同時因果・異時因果をめぐる対論

1. 縁起の定型句の解釈 2. サンガバドラによる上座批判

3. 喩例の解釈：灯火と光

5. 小結

2 相応因の定義

1. 問題の所在
2. 五義平等 (pañca samatāprakāra) 学説の成立

第2章 心所論

1 問題の所在

2 初期説一切有部論書における心所

3 大地 (mahābhūmika) という概念

4 十大地法に包摂される諸法の定義

1. 受 (vedanā) の定義
2. 思 (cetanā) の定義
3. 想 (saṃjñā) の定義
4. 欲 (chanda) の定義
5. 触 (sparśa) の定義
6. 慧 (matī) の定義
7. 念 (smṛti) の定義
8. 作意 (manaskāra) の定義
9. 勝解 (adhimokṣa) の定義
10. 三昧 (samādhi) の定義

5 想の定義に対する疑問と“nimitta”の用例

1. 問題の所在
2. アビダルマ文献における想の定義
3. Nikāyaにおける“nimitta”の用例
4. Nikāyaにおける想
5. 小結

6 根・境・識の三和合と触

1. サンガバドラによる上座批判
2. 小結

第3章 結論

第二部 資料編

第4章 『俱舍論』根品 心所法・十大地法

1 共に生起する法

1. 総説
2. 色法の場合
3. その他の法の場合

2 心所法

1. 心所法の分類
2. 大地法
  1. 十種類の大地法を列挙
  2. 大地法に包摂される法の定義
  3. 心・心所の差異は微細である

第5章 『俱舍論明瞭義』根品 心所法・十大地法

- 1 共に生起する法
  1. 総説
  2. 色法の場合
  3. その他の法の場合
- 2 心所法
  1. 心所法の分類
  2. 大地法
    1. “kila”の意図
    2. 大地法に包摂される諸概念のうち、思・想・触・慧・念・作意・勝解・三昧についての解説
    3. 心・心所の差異は微細である

第6章 『俱舍論実義疏』根品 心所法・十大地法

- 1 共に生起する法
  1. その他の法の場合
- 2 心所法
  1. 心所法の分類
  2. 大地法
    1. 十種類の大地法の列挙
    2. 大地法に包摂される法の定義
    3. 根・境・識の和合と触

第7章 『大毘婆沙論』心所法・十大地法

第8章 PS 想蘊・行蘊-遍行心所 (PS=Pañcaskandhaprakaraṇa)

- 1 想蘊
  - 1 心所法の概念規定
    1. 遍行心所

第9章 PSVibh 想蘊・行蘊-遍行心所

(PSVibh=Pañcaskandhaprakaraṇavibhāṣyaṃ)

- 1 想蘊
- 2 行蘊
  - 1 総説,
  - 2 心所法の概念規定
    1. 遍行心所

第10章 PSViva 想蘊・行蘊-遍行心所

(PAViva=Pañcaskandhavivaraṇa)

- 1 想蘊
- 2 行蘊,
  - 1 心所法の概念規定
  1. 遍行心所

第11章 『俱舍論』根品 俱有因

- 1 俱有因の定義
  1. 基本定義
  2. 心に従って生起する諸法
  3. 共に生起する法の数
  4. 補足説明
  5. 異時因果説からの反論

文献, 略号 参考文献

[第一部 研究編]

「序論」においては、アビダルマ仏教における心所論についてのこれまでの研究者の諸見を要約し、本論文で取り扱う文献と心所論に関する研究史を概観しているが、それについて「心所法として枚挙される諸法が、説一切有部の諸論書においてどのように分類されてきたかについては、これまでの研究で繰り返し報告されてきた。というよりもむしろ、心所論研究はこの整理作業ばかりに視点が注がれてきたと言っても過言ではない。(中略)それに反して心所法各々の概念に関する詳細な検討や、論書の中で取り上げられた心所論に関連する議論、例えば十大地法に包摂される諸法の共存を認めるか否かをめぐる議論などは十分検証されてきたわけではない」と評論し、本研究の意図がそこにも示唆されている。

「第一章 俱有因・相応因について」では、俱有因・相応因について分析し、特に俱有因の定義を巡る議論を通して共存関係論証の主要な論点を整理し明確化している。アビダルマ仏教において六因説が説かれ、そこにおいて俱有因・相応因が提示される以前に、心と心所法との共存を前提とした諸法の共存という着想があることを確認し、心が善・不善・無記のいずれであるかを問う文脈で、俱有・相応という述語が用いられていることから、煩惱や



苦の生起の因果関係を問題として組み立てた教義学説であると見定めてきた従来の研究成果をまず再確認している。その因果関係について、これまでの研究では、俱有因を「同一果を得る関係」、あるいは「相互に果となる関係」と定義する、この両定義が不徹底のままであったと見なされてきた諸文献を検討し、その結果、説一切有部では『大毘婆沙論』以降は「相互に果となる関係」と基本的定義が貫かれていることを確認している。またその共存論証を詳細に検討し、『順正理論』においては、「これ(X)があるとき、これ(Y)がある」という縁起の定型句の前半(A)を俱有因という同時因果の論拠と見なしているという改めての確認を提示し、「これ(X)が生ずるから、これ(Y)が生ずる」という定型句の後半(B)を次第生起という異時因果の論拠と見なしている。更に、『順正理論』における共存論証では、この定型句のAとBをどのように解釈するかについて、受・想・思の三心所のみで定立しか認めない「上座」が三世実有における同時因果を認めず、過未無体を主張することに対する批判で占められ、その説明のための灯火と光の比喩解釈を巡って厳しい批判がなされているが、その論点を精査している。

俱有因一士用果の関係のうち、心・心所法のみにも適用される因果関係が相応因一士用果である。まず、その相応(samprayukta)の意味を巡る諸説について、諸論書の中の所説を確認し、相応因の定義については、五義平等学説があるが、十分に議論されていない曖昧さが残されていると指摘している。

「第二章 心所論」では、『俱舍論』「根品」で説かれる心所論の分析と、『順正理論』の心所論で展開される共存論証が検討されている。心所法に関して十大地法を主張する説一切有部に対して、『大毘婆沙論』における批判対象である「譬喩者」は二心所(受・想)のみで定立を認め、『順正理論』における批判対象である「上座」は三心所(受・想・思)のみで定立を認め、しかも、両者とも諸法の共存を認めず、諸法は順次に生起すると次第生起を主張している。世親もまた、この十大地法という枠組みに対して、どのように対応しているのかについては、『俱舍論』の注釈者の間で解釈に差異があることを『五蘊論』も考慮しながら確認している。

次に、十大地法(受・思・想・欲・触・慧・念・作意・勝解・三昧)の定義に対する『俱舍論義疏』の注釈箇所を解説している。十大地法に限られた範囲であるが、この文献に対する学界最初の解説研究である。さらに、これらの心所法中の「想」について、想とは「nimitta(因相)の把握であ

る」と定義されていることを特に取り上げて、初期仏教文献である Nikāya における nimitta の用例を精査し、それによって想の定義が確定される素地・着想となっている点を究明している。それについて、「初期經典の中では、“nimitta”の語は、心が傾けられる表象の意味で多く用いられてきた。その場合、そこに通底する論題はやはり苦の生起の原因を明らかにすることであり、それは分別の問題と言ってよいであろう。ところで、説一切有部は、認識が成立する根拠を認識対象に求めることから、“nimitta”を把握対象の定立因と定義した」と論じている。

最後に、『順正理論』の心所論の中で議論されている、根・境・識の三和合と触を巡る議論を精査し、その論点を明確に提示している。受・想・思の三心所のみを定立する「上座」は、触という心所を認めない立場から、根・境・識が和合する事態そのものを触（和合＝触）と考えるのに対して、説一切有部では三和合の次の刹那に触などの心所法が生起すると考える、その議論について検討し整理している。その結果として、説一切有部が「触」という心所法を十二支縁起説において扱うよりも、心・心所の共存関係を論証する文脈の中で「触」を扱おうとした課題意識によるものであるという点をも確認している。

## [第二部 資料編]

本研究の基礎資料となっている『俱舍論』及びその諸注釈書のサンスクリット・チベット訳・漢訳を対照・比較・提示し、その和訳を試みている。

## 【論文審査の結果と要旨】

本論文は、諸法の共存関係論証というサブタイトルが示す通り、心所法が常に共存関係にあることを主張した説一切有部学説の検証を目的とした研究である。

本研究によって明らかになった成果について、第一には、本研究では、『識身足論』の段階で、すでに善・不善・無記の心が生起する場合に何らかの共存する諸法があることが述べられ、そこでは諸法の共存という着想が前提となっていることについて諸文献を整理して、再確認している。

第二には、従来の研究では、『大毘婆沙論』は俱有因を「同一果を得る関係」と定義し、『雜阿毘曇心論』・『俱舍論』は「相互に果となる関係」と定

義し、『順正理論』は両定義を持ち出し確定していないと考えられてきたが、そうではなく、『順正理論』・『俱舎論実義疏』の記述から、『大毘婆沙論』以降一貫して、相互に果となるという基本定義が提示され、混乱をきたしてきたわけではない。また、縁起の定型句(A)「これ(X)あるが故に、これ(Y)あり」を衆賢は俱有因(同時因果)の論拠としたことを確認している。

第三には、相応因については、心と心所との相応関係を規定する「五義平等」学説について、それが諸々の論書においてどのように規定されているかを整理したこと。

第四には、『俱舎論』の三大注釈書と見なされる、ヤショーミトラの『俱舎論明瞭義』、スティラマティの『俱舎論実義疏』、プールナヴァルダナの『俱舎注疏随相』のうち、『俱舎論実義疏』と『俱舎注疏随相』は、いまだ殆ど解読研究が進展していない現状であるが、『順正理論』を多く引用しながら詳細な注釈を施していることから、後期の説一切有部論書研究にとって必要不可欠であり、心所法の大地法という限定された範囲ではあるが、それら両テキストの解読を試みていること。

以上、アビダルマ仏教論書には長い増幅の歴史があり、しかも、その内容は極めて複雑多岐であるから、それらの諸議論を整理することは結構厄介である。そのことについて、佐伯旭雅編輯『俱舎論名所雑記』には、『俱舎論』の難解な箇所について、「名高き名所は十六なれど、一部始終がむずかしい、三度四度まで聞ても見やれ、それで解せずば止めやんせ」とあるが、その名所の一つとしてのこれら俱有因や相応因が説かれている六因については「六因四縁の乱れ糸」と表現されている。その中であって、諸法の共存関係が議論となっている中の、善・不善・無記の心が生起する心・心所の関係を課題としつつ、俱有因と相応因における心と心所の共存関係について、諸文献における諸議論を解読し、「乱れ糸」の一部分を整理した努力と、シャープな論旨によって学界に新たな提言をしていることは評価される。課程博士請求論文として十分にその水準に到っている。

論文審査にあたり、敢えて、本論文における課題を指摘すれば、諸文献(特にチベット文献)の解読に一層の努力をすること、本論文に採用していない先行研究にも充分な配慮をすること等が指摘された。

氏名(本籍)	孔 繁 志 (中華人民共和国)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	甲第26号
学位授与の日付	2003年3月18日
学位授与の要件	学位規程第3条第1項
学位論文題目	白居易の文学と仏学
論文審査委員	(主査) 教授 河内昭圓
	(副査) 文学博士 [京都大学] 礪波 護
	(副査) 教授 若槻俊秀

### 学位請求論文審査要旨

白居易(772-846)字は楽天。今に残す詩筆の数約3800首の膨大を誇り、多方面に甚大な影響を及ぼす中唐の文人である。不ずからこの文人に関する研究は古くから隆盛をきわめ、現在なお止むことを知らない。もしこれが研究史を整理するとすれば優に一大冊子の体をなす。現に近年太田次男等編『白居易研究講座』全七巻(勉誠社 第一巻『白居易の文学と人生I』は1993年6月発行)が刊行されたが、その第七巻『日本における白居易の研究』(1998年8月)は白居易研究の歴史を整理して便利を提供したものにはかならない。『白居易研究講座』全七巻の完結は、編集に携わった主だった研究者の必然として『白居易研究年報』(勉誠社 2000年4月創刊)を生むことになったが、太田次男氏はその「創刊にあたって」において「いま、明治以降に限るが、その間に、極めて多数の白氏関係論文が作成された。さきの講座での論文目録とその解説担当者の計算に依れば、邦人による、白氏及びその詩文自体に関する中国文学研究者のものは、ほぼ七二〇点(単行本約八〇点、論文約六四〇点。ただし、論文は戦後の点数)、わが国における受容・影響に関する広い意味での比較文学関係のものは、講座に収録したものに限っても、ほぼ六二〇点(単行本約二〇点、論文約六〇〇点。ただし、論文は主に戦後の文献。論文の実際の点数は、中国文学関係者のものを遙かに

凌駕する)となっている。」と述べている。実際、関係する著書論文の目録を一見すれば、よほどの専門家か乃至は全くの門外でないかぎり、これ以上にまだ何か論に及ぶべきものがあるかと思わせるほどに、広角にして膨大である。

もともと、このような研究史のなかにあって、白居易の文学と仏教を主題とする分野は、比較的はまだ考察を加える余地を残しているかに見える。一般に文学と仏教という主題に対する衆目の傾斜に一定の時間を要したからである。昭和53年(1978)4月、神田喜一郎博士は平野顕照教授の『唐代文学と仏教の研究』(朋友書店)に序を寄せて、「平野君は夙に中国文学を大谷大学に学び、その後長く同大学の教壇に立って中国文学を講じている学者である。しかし尋常一様の単なる中国文学の研究者ではない。その奉職する大学の特殊性をよく活かし、中国文学を研究する傍ら、仏教についても深い研鑽を積み、いわば中国文学と仏教との両刀遣いである。しかもその両刀を両刀として個別に用いないで、渾然と一つに融合して、中国文学の研究の上に、独自の新しい境地を拓いてゆくところに、著しい特色を発揮しているのである。」という。碩学が諸処に燦然とする世代に、文学と仏教を主題とする研究はなお稀少であった。ただしこの主題の究明はその後ようやく盛んとなり、こんにちでは社会的事情から遅滞を余儀なくされていた中国人研究者のあいだでも隆盛となる状況にいたっている。白居易の文学と仏教に限って言えば、篠原寿雄「唐代禅思想と白居易」(『印度学仏教学研究』7-2 1959年)・平野顕照「白居易の文学と仏教——僧徒との交渉を中心として——」(『大谷大学研究年報』16 1964年3月)などが比較的早く、前出平野顕照教授の『唐代文学と仏教の研究』所収「唐代文学と白居易の位相」中の「白居易と仏教」、孫昌武撰、副島一郎訳「白居易と仏教・禅と浄土」(前出『白居易研究講座』第一巻『白居易の文学と人生I』所収)などがつぎ、ほかに禅学研究者からの論及がある。本論文はこのような研究環境のもとに白居易の文学と仏教の関係を果敢に論じ、自ら得た知見を述べようとするものである。

本論文は大きく第一部分と第二部分との二部構成となっている。第一部分は「その仏教・仏学に関する思想的受容を中心に」と副題し、Ⅰ、研究の目的 Ⅱ、仏教との出会い Ⅲ、白居易の仏教観 Ⅳ、早期における仏教・仏学に対する体得 Ⅴ、中期における仏教・仏学に対する体得 Ⅵ、晩期にお

ける仏教・仏学に対する体得 VII, 結論と目次する。第二部分は「仏教・仏学に対する文学的受容を中心に」と副題し, I, 仏教・仏学に対する文学的受容という視点について II, 「長恨歌」の文学性に見られる仏教的要素——リズムと音声における荘厳感 III, その仏教・仏学の文学創作への投影 IV, 白氏詩文にある文学思想から仏教的要素を読む V, 結論と目次する。(以上いずれも節目・項目を省略。全体は400字詰原稿用紙381枚に相当)

第I部分は、生涯にわたって仏教と深く関わった白居易にとって、仏教はどのような意味をもったか、白居易は仏教に何を求めたかを追究する。一人の文人の文学や思想の変遷を考察するとき、生涯の境遇の変化に応じて時代を区分する手法は常套である。論者もまた同じ手法を採る。常に作品を前面に押し立てながら、生きた時代の政治状況には礪波護「白居易の生きた時代」(『白居易研究講座Ⅱ』所収 1993年7月)、その出自や平生には、花房英樹『白居易研究』(世界思想社 1971年3月)・平岡武夫著、礪波護編『白居易——生涯と歳時記』(朋友書店 1998年6月)、版本問題には花房英樹『白氏文集の批判的研究』(中村印刷出版部 1960年3月 のち朋友書店増補再版 1974年7月 ただし本論では底本に1979年6月中華書局印行『白居易集』を用いる。), 禅宗教義並びに禅宗史には柳田聖山『初期禅宗史書の研究』(法蔵館 1967年5月 のち同『柳田聖山集』第六巻 1999年1月)など多くの先人の信頼ある業績に依ってその生涯を手堅くまとめている。

白居易については、壮年期には中央にあって政治に深い関わりをもつ諷諭詩人の名目があり、ひとたび貶謫されたのちは富貴功名の希望を捨てて閑適詩人となったとする普遍的な説がある。論者はその説を排し、富貴功名の希望を捨てた事実はなく、諷諭詩人であったときにも閑適詩は存し、生涯その詩作は続くとする。白居易が生きた時代の中国仏教は各宗が複雑に錯綜するが、その大勢を概略していえば、徳宗の貞元年間(785-804)までは洛陽を中心にして神秀(606?-706) - 普寂(651-739)と嗣承する北宗が優勢で、江南においても湛然(711-782)の出現を得て中興を果たした天台と北宗が緊密な関係にあって隆盛であった。憲宗の元和期(806-820)以降は慧能(638-713) - 懷讓(677-744) - 道一(709-788)と次第する南宗の長安進出が著しく、南北確執を経て漸く南宗に収斂されていく。白居易と仏教の軌跡はこの大勢に同じく、貞元15年(799)洛陽聖善寺に『楞伽經』を講ずる凝公に師事して北宗禅を承け、元和6年(811)母の死に伴う服喪の間に

習禪に励み、元和9年(814)には馬祖道一に法を嗣ぐ惟寛(755-817)に付いて南宗禪を承けた。いよいよその行動と思想は仏教に傾斜するが、それは時勢に自然に身を委ねたもので、自身の中に南北の確執矛盾はなく、さまざまな修学も相当期間の修禪もただ閑適にこそ思想として結実したものであると結論する。すなわち仏教教義の理性的理解はそれを文学作品として表われるときしばしば理性的表現をとって仏教的作品と位置付けられるが、白詩の本領は理性的理解を感性的表現に変換するところにあるのであり、それが閑適詩であるとするのである。

第二部分は、「仏教・仏学に対する文学的受容という視点について」と副題するように第一部分で展開した感性的表現という視点を一層深めて議論を進めている。論者はまず「これまでの白氏の仏教と文学に関する研究の殆どは、白居易の仏教に限って論じられているものであり、その仏教と文学の関連に関しての研究ではない。また、白居易の文学と仏教の関連という問題意識から出発した研究でも、その殆どが例外なく、白氏の作品中に多く存在する仏教活動の記録であり、仏教用語、禪師との付き合いなどについてのまとめであり、その仏教的足跡をたどるにすぎない。」として従来の研究に不満を呈する。もとよりそれらの一見して仏教との関わりを示す作品を取りあげて仏教教義と白居易の受容態度を究明する基礎的作業の重要性を認めるものであるが、一見してはそれが仏教的とは判じがたいまでに昇華された作品を理解してはじめて文学的究明ではないかとする思索の方向性が論者の根底にある。かくて一つは「長恨歌」のリズムと音律における荘厳感に仏教的要素の存在を探ろうと試みる。唐代講唱文学の隆盛、通俗への伝播、その唱誦性、詩話に見る「長恨歌」と「目連変」との対応等に論証を加えながら音声上の宗教的荘厳感を導き出し、「長恨歌」は読むためのものではなく、唄うことに意味があり、それは白居易の仏教理解が感性として表出したものであると結論する。従前平仄を解析してそのリズム感に留意した見解がなかったわけではないが、論者発想の端緒は幼少年期における自己体験にある。論者の言によれば、常に母親からこれが朗誦を求められ、唱誦反覆の間に自ずと涙したという。「長恨歌」の理解には吟味という手続きを必ずしも要せず、僧徒が誦経するがごとく速く読むほどにその味が得られ、白居易作詩の底意に士大夫の吟味から庶民的唱誦への転換があったと推測する。現代日本人には味わい難い体験的視点であるが、論者はこれを論に活かして独創的知見を示

し得たといえる。

次に一般に写景詩と考えられている詩篇のうち、内容のうえで時間や場所に齟齬するところあって、従来解説者・翻訳者を悩ませてきた詩句を多く取りあげ、それらに解説を加えながら、景物を直感的直覚的にとらえ、一瞬に閃き現れて移り変わる心の動きを詩に表現したものとす理解を示す。たとえば「盧侍御与崔評事。為予於黄鹤楼致宴。宴罷同望」詩（『白居易集』巻15）に「白花浪濺頭陀寺。紅葉林籠鸚鵡洲。總是平生未行處。醉來堪賞醒堪愁。」とあるを取り上げる。起句と承句は一見写景に見える。しかしここにいる頭陀寺は水辺になく波浪の飛沫を被ることはない。そもそも頭陀寺も鸚鵡洲も黄鹤楼からは見える位置にない。実際に目にするのは滔々と流れる長江の水のみである。したがってこれは写景詩とはいいがたいものであり、眼前にする風景とは大きく矛盾して古来多くの読者を悩ませてきた。論者はこの句を解して「これは実在する風景を詠じたものではなく、心に感じたことを即興する夢幻化した虚構である。」とし、「外在的な景物に触れて生じた感情を表わした『感興』でもなく、内的な心情を外在的な景物に借りて述べる『興寄』でもなく、先に心情あって心情に適した景物を随意に組み合わせたに過ぎない。すなわち創作目的は心境という精神状態を表現するにあり、それは李白の想像や誇張、杜甫の興寄とは表現の手法が全く違う。」とする。かくして心物が混然一如とする詩境に白居易の仏教理解の深まりを認知しようとする。

いま一首「暮江吟」（『白居易集』巻19）を例に挙げる。「一道残陽鋪水中。半江瑟瑟半江紅。可憐九月初三夜。露似真珠月似弓。」一詩は平易にして清楚、珠玉の名品である。白詩に訳注を施して広く一般の用に供する選集の類はことごとくこれを採り、その解には夕暮れの風景と鑑賞するが、論者は異を唱える。起・承句は夕暮れ、転・結句は深夜の描写として時間的矛盾を指摘したうえで、白居易の視点に長い時間の推移を看取し、長い時間を直覚的に一瞬のうちに凝縮して表現する手法に白詩特有の価値を見いだそうとする。一瞬の凝縮は客観の風景を主観の風景に転化するもので、このような表現手法は禅思想の体得がもたらす結果にほかならないとする。これを要するに表現上の矛盾は白居易の心底に矛盾でなく、禅思と詩情はここに障りなく表出され、直覚的な実感によって体得できた心の真実を文学の真実として表現したのであると結論する。新解の提示である。



直接的に理論をいわずとも、個々の作品そのものの中に作者の思想を読み取る手法は、2000年と2002年の二次にわたって大谷大学特別セミナーに登壇した中国南開大学羅宗強教授の研究法に学んだものと思われる。羅教授は古人の評論を解説する作業によって文学史を講ずる従前の普遍的手法を排し、徹底して作品個々に潜む思想を抽出し、時代の思潮を斟酌して名著『隋唐五代文学思想史』(上海古籍出版社 1985年 のち修訂本中華書局 1995年)を公刊した。上記特別セミナーでは同書を基本テキストとして唐代文学思想史が講ぜられたのであるが、この間、論者は通訳の労をとると共に、私淑して研究法の指導を受けた。かくして本論文においてもその成果が現われ、白詩に対する一つの理解法を提示し得たと思量する。

論者孔繁志は、中国首都師範大学日本語科に在籍して日本の教育制度を研究する学徒であった。したがって少なくとも四年前までは中国古典研究に関しては門外の人であった。すでに中国にあっては過去の状況と異なり、古典研究の社会的回復が進み、仏教との関連研究も失地挽回の気運が高まっていたが、孔繁志の周囲と自身の意識には状況認識にまだ不足するところがあった。研究課題の転向は留学を決意して後のことであった。そのような事情であったことが、むしろ本論文の主題を選択させたといえる。もし多少とも専門に予備的知識があれば、殊に日本における白居易研究の水準と成果の膨大を目前にして逡巡するを余儀なくされたに違いない。課題に取り組んだ当初、問題の大きさに直面して驚愕したと思われるが、ひとたび決意して以降は、毫も主題に対して揺れたことはない。羅宗強教授の知遇を得たことも僥倖であったが、よく精励して短い期間のうちに専家の域に達した。本論を通じていえば、許される範囲において日本語の用法に多少の難が認められること、禅学理解がひたすら柳田聖山教授の諸論著に依って直線的で深みに欠けること、歴史事実や古代の制度に対する認識にやや不足するところが認められること、しばしば直感に頼って考証を欠くことがあること等今後課題をのこすが、白詩の理解に論者独自の知見を示し得た点は評価されてよく、課程博士請求論文としてその水準に達していると判じた。

氏名(本籍)	ちん 陳	しん 震	(中華人民共和国)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	甲第27号		
学位授与の日付	2003年3月18日		
学位授与の要件	学位規程第3条第1項		
学位論文題目	Voli Me Tangere —A Study of Touch in the Thought of D.H. Lawrence		
論文審査委員	(主査)	博士(文学)[大谷大学] 教授	Norman A. Waddell
	(副査)	教授	Monica A. Bethe
	(副査)	Doctor of Humane Letters[セント・オラフ大学] 帯広大谷短期大学長	多田 稔

### 学位請求論文審査要旨

#### はじめに

英文150頁から成る本論文は筆者が本学修士に入学以来5年間、一貫して研究を続けてきたD.H. Lawrence (1885-1930)の思想、小説、詩の研究の成果である。論文は流れるような文体の英文で書かれていて、しかも読み終わった時に読者に強いインパクトを与えるものとなっている。ロレンス思想の基本である人間の肉体の枠組に始まり、その特徴である「無意識」の役割と意味内容をきちんとおさえ、霊肉の二分割をとるキリスト教によって軽視されてきた肉体の復権をはかり、人間の知性や理性ですらも、人間の生命の核心であり創造性の源泉である肉体の「無意識」の昇華したものとすろレンス思想を順を追って克明に説明している。かくしてロレンスの小説作品の随所に登場する alienation (自己疎外)に悩む現代人に対する処方箋ともいべきロレンスが説く人間関係の調和思想と肉体のもつ治癒力が明らかにされていく。現代人の蘇生・再生を、キリストの復活とは一味違った、ロレンス独特の形で実現させるのである。ロレンスはその小説作品の多くの登場人物を通じて、生命力みなぎるダイナミックな生命礼賛思想を展開し、「無意識」の世界に裏打ちされた天真爛漫な肉体の発露を詩的表現によって描い

ていくのである。

つまり、いわゆる客観的、分析的、科学的な事実描写といったリアリズムの手法を排し、ロレンス独特の象徴的詩的表現によって描かれているのである。筆者はこのロレンス思想の核心にある思想を、肉体的接触、タッチの思想にあると断じるに至るのである。そうして、そこからロレンス思想の様々な局面の解明を行っていくのである。この論文の標題は *Voli me tangere* (我に触れよ) であるが、この言葉は新約聖書 (John 20 : 17) における復活したキリストが墓前に佇むマグダラのマリアに向って発した言葉 “*Noli me tangere*” (我に触れるな) をもじり、それを逆手にとってロレンス思想を盛る本論文の標題としたものである。

ロレンスは現代人の再生のためには生命力の発露である真のタッチが必要欠くべからざるものであることをその文学作品の中で説いていくのであり、タッチが不自然でバランスを失した場合の悲惨な状態をも描いているとして、筆者は本論文の後半にその実例をあげているのであるが、前半においてはそのタッチに至るまでの過程をくわしく辿って順序立てて詳細に論じている。筆者は20世紀初頭にはじまるフロイトの精神分析における「無意識」との関連を取り上げ、ロレンスが先輩フロイトの説いた「無意識」の意味を更に拡大、深化しロレンス思想の確立をみるに至ったいきさつをロレンスの龐大な著作集の中から2つのエッセイ、『精神分析と無意識』(1921)と『無意識の幻想』(1922)を取り上げて、詳細に分析している。作品中に随所に現われるタッチとその治癒力による蘇生の概念が、本質的に心理学的なものであると筆者は認識しロレンス思想の中でのこの部分を究明するに当ってロレンスの心理学に関わる作品としてこの2冊を大いに利用しているのである。

かくしてフロイトの「無意識」がロレンスにおいては「自然的な意識」とせられていくのである。そしてそれを「極めて重大な生命力の源泉と再定義していくのである。人間の生理的、心理的、構造の面からその問題の解明を徹底的に行っている。その結果をふまえて、端的に言えば、人間の肉体の下半身の働き、殊に天真らんまんに行われる性的機能の発揮に極まる、官能性が触発される構造と、下半身から上半身、上半身から頭部へと昇華されるにつれて変化する人間の生理学、そして人間の肉体のもつ奥深さとその機能力に関するロレンス思想の解明とそれらを統一する調和の思想についての解明がなされていく。筆者は上述の視野を見すえながら論文の主題であるタッチ

に入る。論考は大きく次の3部に分けられ、さらに細分化させられ論考がなされている。

## 論文の構成

### 第一部 ロレンスの肉体的蘇生に関する概念

#### 第一章 ロレンスが蘇生というテーマを強調した理由

##### 第一節 個人の経験

##### 第二節 個人的再生に対する希望

#### 第二章 精神の抑圧からの肉体の解放

##### 第一節 精神以前の意識のフィールドとしての身体

1. 意識の主要な中心部の発達
2. 肉体と無意識の発達
3. 精神以前の無意識

##### 第二節 身体の道具としての精神

1. 精神の役割
2. 精神の主な機能

##### 第三節 精神に抑圧されている身体

##### 第四節 精神と上半身に抑圧されている下半身

#### 第三章 ロレンスの再生のゴールである有機的な統一

##### 第一節 個人の有機的な統一

1. 肉体と精神の統一
2. 人間意識の昇華と一新

##### 第二節 個人の再生に必要である人間関係

### 第二部 肉体的タッチ

#### 第一章 タッチの感覚

#### 第二章 内面的生命力の自然的な交換であるタッチ

##### 第一節 無意識であるタッチ

##### 第二節 ネガティブなタッチ

##### 第三節 ポジティブなタッチ

#### 第三章 性的なタッチ

##### 第一節 性的なタッチの重要性

1. すべての人間タッチの中で最も基本的なものである性的な

タッチ

2. 無意識的である性的なタッチ
3. ネガティブな性的タッチ
4. ポジティブな性的タッチ

第二節 性行為の重要性

1. 性行為の概念と機能
2. 偽りの性行為
3. 人間関係のシンボルとしての性行為

第三部 蘇生におけるタッチの役割

第一章 現代人の再生における必要な治療方法としてのタッチ

第一節 ロレンスがイエスの言葉“noli me tangere”(われに触れるな)を“voli me tangere”(われに触れよ)に書き換えることにみられる人間再生におけるタッチの重要性

第二節 利己主義および自己疎外の治療方法としてのタッチ

第二章 ロレンスのフィクション(小説作品)に見られる治療力としてのタッチ

論文内容の要約

第一部「肉体的蘇生」は、ロレンスの人間再生についての考えの中の2つの不可分の要素である肉体的蘇生や個人間の関係の概念およびその2つの要素の関係を究明する。まず、ロレンスが作品の中で蘇生テーマを強調する基本的な理由を探求する。そして、現代人の身体に生命力を回復することによって個人の有機的な統一体という再生の目的を達成しなければならないというロレンスの考えの根源を、彼の身体や精神についての心理学的な見解によって究明する。最後、個人間の関係が個人の心理に必要で、個人の再生にとって極めて重要であるというロレンスの考えを論述する。

第一章は、ロレンスが多くの作品の中で蘇生というテーマを強調する2つの理由をたどろうとする：(1) 彼が自身の経験、特に第一次世界大戦に彼が経験した個人的苦痛および1925年の重病からのめざましい回復である；(2) 現代人の再生に対する彼の望みである。

第二章は、ロレンスの身体や精神の概念を究明することによって、彼は現代人が肉体的な再生をしなければならないと主張する理由は、身体が精神に

よって抑えられるということにあると論ずる。ロレンスにとって、無意識は生命力の源泉であり、身体がその産物である。一方、精神は、身体ターミナル的な道具である。ロレンスは、現代人の身体が精神によって抑圧され、また、無意識的あるいは自然的意識が精神的意識によって抑圧されていると考えた。さらに、彼は、下半身(身体中の生命力の源)が精神および上半身によって抑圧されていると考えた。それは、ロレンスの肉体的な再生を望む理由である。

第三章は、個人間の関係と、肉体的な再生の結果である個人の有機的な統一体との関係を究明する。ロレンスは身体および無意識の重要性を常に強調したが、彼は精神の真の役割を否定しなかった。彼は、身体および精神が再び結合し、調和して機能するべきであると考えた。ロレンスにとって、身体を本来の役割に戻すことおよび身体と精神の結合によって、個人の中で自然でダイナミックな意識をもたらすことができる：解放された無意識が下半身から上半身および精神に「昇華」し、そして一新のために下半身に戻る。ロレンスは、このような個人の有機的な統一体に、人間関係が極めて重要であると考えた。現代人が宇宙の生命力との関係を失ったというロレンスの深い確信は、彼が真の人間関係を望んだ原因である。ロレンスは、外部の宇宙および他人との関係なしでは個人が真に生きる(生命力を持つ)ことができず、個人の意識が他人の意識と調和するべきであると考えた。また、彼は、真の人間関係が個人の心理の完全さ(身体と精神の統一)に必要であると考えた。

第二部「肉体的タッチ」は、ロレンスにとって、真の人間関係あるいはタッチが何を意味するのかを究明する。ロレンスのタッチの感覚に対する心理学的な分析を明らかにすることによって、タッチ、特に性的な(男性と女性との)タッチは、自然的あるいは無意識的であるべきであることを論述しようとする。

第一章は、タッチの感覚が身体で最も重要な感覚のうちの一つであるというロレンスの考えを明らかにする。彼の人体に対する心理学的な分析では、タッチの感覚が、身体五感のうちの一つで、身体の全体に分布されていることで他の4つの感覚とは異なる。

第二章は、真のタッチが自然的であるというロレンスの考えを論述する。彼は、タッチが、触れる人と触れられる人の間の内面的な生命力の無意識的な交換であるべきであると考えた。これはネガティブとポジティブな面で彼

のフィクションで見られる。彼のフィクションでは、主に2つの種類のネガティブなタッチがある：(1)「盲目の夫」,「プロシアの士官」,「あなたはよくにさわった」などの作品の中で、タッチにおいて、触れる人は無意識的であるが、触れられた人の肉体は精神にコントロールされているので、タッチは失敗または破壊で終わる；(2)「カンガルー」などの作品の中では、敏感である触れられた人が、触れる人の冷たい精神によって侮辱されたと感じる。一方、ポジティブなタッチは「指ぬき」,「死んだ男」等の作品で見られる。それらの作品の中では、触れる人と触れられた人の両方とも、精神に束縛されていない、肉体的なタッチの必要性を理解できる個人である。

第三章は、ロレンスの性的なタッチについての考えを究明する。性的な(男性と女性との)タッチは、最も深い意識を含んでいるから、すべての人間タッチの中で最も基本的なひとつである。ロレンスにとって、性行為は性的なタッチの最も重要な明示である。真の性行為が男性および女性の両方の血液を更新することができる、一方、偽りの性行為あるいは精神的な性行為は、身体および血液を破壊する。ロレンスの著述中で、性行為は真の性的なタッチのシンボルだけでなく、すべての真の人間関係のシンボルである。

第三部「蘇生におけるタッチの役割」では、人間の再生における人間タッチの重要性と役割を究明しようとする。

第一章は、人間タッチが現代人の再生に必要であるというロレンスの考えを明らかにする。彼は、現代人が他人との真の関係を持っていないから、身体の生命力が消えてしまうと考えた。ロレンスがイエスの言葉“noli me tangere”(私に触れないで)を、“voli me tangere”(私に触れて)に変更した理由は、真の人間タッチ、特に性的なタッチが現代人の主要な問題である利己主義および自己隔離を取り除くことができるという彼の考えにある。

第二章は、個人の再生におけるタッチの治癒力を究明する。それは、ロレンスのフィクションの中で見られる：『アーロンの杖』(リリーは、アーロンの下半身にマッサージを施し、彼を治す),『羽毛ある蛇』(ラモンは、儀式を実行し、シプリアーノの全身に触れることによって、彼を無意識的なリーダーへ導く),『博労の娘』(医者はメイベルに触れられ、内面的な生命力が回復する),『チャタレー夫人の恋人』(コニーはメラーズとの性的なタッチによって自然的な女性になる), および『死んだ男』(死んだ男は尼僧の儀式的なタッチによって宇宙の生命力と一体になり完全な人間に治される)。

## 評価と問題点

筆者は「無意識」の dark God を標榜するロレンスの歴大な著作集を片端から読み、ロレンス思想への十分な理解を示し、時には強い共鳴を交えて、多くの資料に当り、丹念に論文を構築している。第1次資料の読破、第2次資料への目くばりも充分とうかがえた。ロレンスが育ち活躍した19世紀末から20世紀への時代の転換にはじまり、西欧人にとっては未曾有の事件であった第一次世界大戦の戦前、戦中、戦後の激動の西欧世界という、時代背景もしっかりと押さえている。又ロレンス個人の教育及び特異なその家庭環境の影響、ドイツ貴族の娘フリーダ、ノッティンガム大学書誌学教授夫人との出奔など話題に富んで、ややもすると外的影響が重視されがちなロレンスの伝記的生涯の中でそれに幻惑されることなく、ロレンスの思想形成の出発点をその時代の最新学説であったフロイトの「無意識」におき、その発想をロレンス一流の「無意識」論へと発展させていった産物であるロレンスの2冊の著作を充分理解している。その結果、ロレンスが到達した(われに触れよ)の哲学のキーワードとして「タッチ」に注目するに至ったのである。

タッチがある条件の下で、つまり調和的人間関係や天真らんまんな自然的環境で発揮される状態を、独特な象徴的手法で描いていると断じ、その点からロレンスが文明論を展開していったと結んでいる筆者の論点は高く評価できる。すべてをその一点に集約させ、その裏づけを刻明に行っている点も良い。筆者はロレンス研究のため、博士課程在学中にロレンスの家庭のあった、かつての炭坑町イーストウッドからさほど遠くないところにあり、彼の母校であったノッティンガム大学の「ロレンス研究センター」を訪ねて、世界中から集ったロレンス研究者たちとのセミナーで一ヶ月の勉強も行っている。論文の背景をなす最新の客観的資料についても、充分の用意がなされたと判断できる。唯一この論文の弱点は比較の視点であろう。フロイトとの比較は充分なされているが、現代的テーマには事欠かないロレンスであれば、もっと比較の視点や他への言及があってもよかったと思われる。つまり、英国ロマン派の源流でもあった William Blake やその他の生の礼讃者たち、あるいはロレンスの友人であり、対照的な思想の持ち主であった Aldous Huxley に影響を及ぼした点、そして、『対位法』や「パスカル論」で生を礼讃するに至ったハックスレーが『メキシコ湾の彼方』からは歴史的視点に立ちロレンス批判に転じ変容せざるを得なくなった点もロレンス思想の限界を示



すものではないのだろうか。しかしながらこの論文の重みはそれらを補って  
余りあるものがある。着想, 方法論, 構成, 資料, 参考書, そして, 書かれ  
ている英文の文体の質などにおいて高く評価できる。日本におけるいわゆる  
課程博士の論文として充分認められるものである。主査と2人の副査の意見  
は完全に一致した。